
短歌

火水 風地

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短歌

【Nコード】

N7709B

【作者名】

火水 風地

【あらすじ】

ある怪しい教室に通い始めてからしばらく経った時のこと

（前書き）

キャラクターにはリアル感がありません。そこところよろー

私、わかないしいら若無椎羅はとある高校の二年生なのです。

二年連続の二年生なのです。

恐らくは来年も二年生をやっていることでしょう。

私が不本意にもダブってしまった理由、それはとある和歌教室のせいなのです。

和歌教室というよりは馬鹿教室といった方がいいのかもしれない……ん……

しかし今日もその和歌教室に私は向かっています。ほぼ無意識です。

今日は平日なのですが和歌教室に行かないと、なにか人生が始まらないような気がして……

馬鹿はうつるものです。

頭では学校に行ったほうがいいと分かっているのですが、それでも気付けばいるのです和歌教室に……

ああもう着いてしまった……この無意味な教室の本拠地に。目の前にそびえ立つビルを見上げる動作をしても頂上は見えはしないです。それほどまでに高いビルなのです。恐怖さえ感じます。

入口に夢遊病患者のようにフラフラと入った私は入って早々に美人の受け付け嬢さんと目が合ってしまった。毎度の事なのですが。

「ヘイ、ラッシャイ！」

お姉さんが目が合った刹那、威勢よく訳の分からないことを口走りました。

受け付けのお姉さんだって始めはこんなじゃなかったと思います。

記憶は曖昧なのですが、お姉さんは確か私がここで習い始めてから一週間ほど時間が経ってから、ここで受け付けの仕事を始めたんだったと思います。

その頃は確か……

「Hello . . . how are you？」

とかそんな感じだったと思います。

私はこのお姉さんを見るたびに社会の厳しさをおもい知らされます。同時にピーターパン症候群にもなりかけてしまうのです。

大人になってしまえば当然仕事をしなければいけません。ですが……このお姉さんを見る度にやはり思い知らされるのです。仕事の代償の大きさを……

ふと、お姉さんに返事を返さなくてはいけないことを思い出しました。そうしてお姉さんに負けじと私も声高らかに注文したのです。

「甘海老！　ワサビ抜きで一卷」

突然のことでした。眼前の風景が急に揺れるように歪んできたのです。そして気付いたのです、いや気付かされたのです。

やはり私も馬鹿教室の毒に侵食されてきているんだということに。

あの揺れは恐らく私の中の理性という名の天使が私に危険を察知させようとしておこしたのでしょう。

しかし残念ながらそれを理解している今でも私にはこの麻薬は止められないのです。この和歌教室という麻薬の魔の手からは……逃れることは出来ないのです。

私は頼んだ甘海老の事さえ忘れ、和歌教室のある二階へと走りだしました。もう我慢が出来なかったのです。早く指導を受けたかったのです。それが、結果私の人生に多大な悪影響を与えるのだとしても、私にはどうしようもすることが出来ないのです。私にはこの麻薬は効き過ぎているのです。

二階へと駆け上がった私は今、ユートピアへの扉を開こうと見栄えしないドアノブに手をかけています。

この見栄えしないノブでさえ中毒者にはダイヤモンドのよう輝いて見えるのですから、なにか恐ろしい気さえしてしまいます。

理想郷への扉を開いた瞬間私は怒鳴られました。

「遅いですよ！」

仕方ないではないですか！ 親が私の脚にしがみつながら「お願い、お願いだから変な宗教にはまらないで」って泣き付いてくるんですもの。……とは言えないのです。

言い訳などすれば即刻辞めさせられてしまうからなのです。そうして辞めさせられた人を私は多く見てきました。土下座して謝る者さえいましたが結局は一度決定された事は変えられることはありませんでした。

室内には私の他に三人ほど人がいました。どの人も笑顔です。

「さつ、座りなさい」

私の教祖様が指を指した先にはペタンコの座布団が置いてありました。

私は躊躇わずそこに座りました。少々脚が痛いのですが正座です。

「さあ、始めましょう今日は短歌です」

「先生！ 今日、っていいですけどずっと短歌しかしてませんよ」

この教室に通う唯一の男である信藤が先生のあげ足をとった。

「信藤！ 口を慎め！」

先生のしわがれた声が妙に私のストレスを増してくれます。

ふっ、信藤注意されてやがるです。と私は心の中でほくそ笑みま
した。

私は信藤が嫌いです、いや正確に言えばタヌキが嫌いなのです。
そうです、信藤はタネキそっくりなのです。もしくは豚です。私は
豚も好きではありません。勿論、豚の角煮は好きなのですが……信
藤は煮ても好きにはなれません。

「あの早くしてくれないですか、ババアが！」

隣に座る兎望ともちさんが先生にたいして暴言を吐くのを私は聞きました。
た。しかしその声はミジンコが話したら、こんぐらいの音量なので
はないかと思われるぐらいのものでしかなかったのです。

当然ババア……もといくそババア……もとい先生には聞こえてい
ないようでした。私は兎望さんの隣にいたから聞く事が出来たので
す。これは運命なのでしょう。私はこの運命に従いババアに
チクったほうがいいのでしょうか？

そんな思いも先生の発言により私の頭の中から消えてしまいまし
た。

「お題は自然です。今日は連歌でいきましょう。始めの五七五は
貴方がたが言つて後の七七は私が言つて、上手い具合に貴方がたの、
へたくそな歌をカバーしてあげましょう」

「ほーじゃ俺からいかせてもらっぜババア……」

タヌキが自尊心をくすぐられたようです。「ふつやはりタネキはタネキ所詮脳が小さいのです」と私は言いほくそ笑みました。タヌキが横目で睨んできましたが、私はタヌキに睨まれたところでビビるような、たまじゃありません。

「春風や、頬に流る、涙さえ……」

タネキは言い終わったあと『やってやったぜ』的な表情をしましたがとても不細工です。見てられません。

「じゃいきますよ」

先生はタネキの戯れ事の次に続けて歌い始めました。

「……もったい勿体ないと、飲むお前馬鹿」

解説します。つまりは先生は、春風に吹かれつつも涙を流すタヌキはきつと貧乏だろうと予測し、その涙さえも飲んでしまうのではないかと考えたのです。

「くっ中々やるなババアが！」

タネキは負けを認めました。「負けタヌキの遠吠え、見苦しいですよ。タネキが！」と私は言いほくそ笑みました。

横目でタネキから睨まれた気がしますが、私はタヌキに睨まれただけでビビるような、たまじゃありません。

「次は私が行こうか」

兎望さんが恐れる様子なく宣言しました。私個人としては兎望さんは好きですので頑張ってもらいたいと切に想います。

「岩に似て、荒波揉まれ、風化する……」

坦々と言つてのけましたがこれは、凄いです。

解説します。兎望さんはお歳をめした先生は世間の荒波に揉まれすぎてもう風化した岩のように風化しちゃてんじゃないの？と考えたのです。

「……い、いきますよ」

先生は少なからず動揺してしまっているようです。先生の顔には苦悶の仮面が張り付いてしまっています。

「……角がとれば、愛らしくなる……っ！」

……これは

無理矢理ですね。今日のところは兎望さんの勝ちでいいのではないのでしょうか？

私は先生が兎望さんに負けた瞬間、理性を取り戻しました。

「はいっ！先生の負け！私もう学校行ってきます」

麻薬の誘いにはもう負けないぞ。

（後書き）

まともに書いたような、でもキャラが酷いことになってしまっているような、コメディーはどこまでキャラをくずせばいいのかわかりませんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7709b/>

短歌

2010年10月28日04時50分発行